

2026年3月: もう一つの合気道?

合気道の達人である武田義信の息子で、太極拳の指導者であり整体師でもある武田大雄は、紛れもなく芸術の申し子である。しかし、「彼」の芸術とは一体何なのだろうか？

「非接触」合気道についての議論をよく耳にしますが、その中で最も熱弁を振るうのは間違いなく批判する側です。しかし、批判する側は大抵、非接触合気道について知らないだけでなく、情報を得たことも、あるいは探そうとしたことすらない人たちです。武田大雄先生は、非接触合気道を具体的で、実り豊かで、そして楽しいものにしてくれます。では、まずはアンジェロ・アルマーノ氏のご厚意により、イタリアのプロジェクト合気発行の雑誌「合気」第5号31ページに掲載された情報から始めましょう。

万年合気道とは、植芝盛平翁の合気道、すなわち晩年の極致を意味し、ある意味で彼の歩みを総括するものです。植芝は間違いなく複雑な人物であり、武道、あるいは開拓精神、環境保護、宗教、社会政治的ビジョン、あるいは日本の伝統文化といったものだけで説明できる人物ではありません。私たちが彼と結びつける合気道は、武道全般の本質、すなわち自己と他者を守る必要性、そしてこの地球上での生命の価値を反映しています。この冒頭の言葉は文化的・哲学的、ひいては精神的な側面を暗示しているように思われますが、晩年合気道の内容は決して抽象的なものではなく、肉体的にも精神的にも繊細かつ高度な技術を要するものの、指導可能な具体的な武道なのです。

最後の段落には全く同意しますが、一点付け加えておきたいことがあります。晩年合気道は確かに肉体的にも精神的にも厳しい鍛錬法ですが、練習する喜びは決して劣るものではありません。武田大雄先生がそれを体現しています。しかしまず誤解されている点を明確にしておきましょう。万年合気道では、接触は単に存在するだけでなく、積極的に求められるものです。確かに私たちが普段用いている、あるいは求めている接触とは必ずしも同じではない様々な形態の接触が含まれますが、だからこそそれらは互いに補完し合い、必要不可欠なものなのです。決して代替となるものではありません。

身体的な接触は存在するが、それは決して強引であったり、互いに反発し合うものではない。動きは主に上肢ではなく、全身を遣い、全身で裁く。例えば、受けが肩をつかむ片取りを想像してみよう。力で反応することを避けることで、単にその標的を奪うことで、敵意を挫くことができる。どのように？ 全身を使うことによって。右上の写真の例では、骨盤の回転によって、受けのエネルギーを、無害であるだけでなく、相手の中心軸を崩したり、バランスを崩させたりする方向に向ける。

足捌きを用いた体の動きもまた有効な手段であり、相手の「攻撃」軌道から身をかわし、相手のエネルギーと自身のエネルギーを融合させて中立的な方向へと導くことができる。これらは既に馴染みのある技法だろうか？ 確かにそうだが、武田先生はそれらを一般的な方法やニュアンスとは異なる形で活用できるようにし、稽古に新たな地平を切り開く。



武器を使った稽古も、相手がいない単独の型と、組太刀の決定的な攻防の型に分けられるのが一般的ですが、これらのルールは例外ではありません。

しかし、刀を手をしている時でも、より繊細で巧妙な接触方法を模索することで、あらゆる敵意を無力化し、同時に反撃の余地を一切残さないような攻撃の可能性を秘めることができます。

この時点で、読者はこれらすべてが非接触合気道の前提条件なのかと疑問に思うだろうことは容易に想像できる。確かに、これによって様々な接触形態を探求することが可能になる。しかし、完全な接触の不在は決してあり得ない。



もし受けが我々の動きによって方向感覚を失い倒れた場合、たとえ物理的な接触がなかったとしても、間違いなく別の形の接触が存在したことになる。

それは精神的なものか？心理的なものか？定義を求めるかどうかは問題ではない。その存在と有用性を認めることが十分かつ必要なのだ。

究極的には、「非接触合気道」という定義は、あらゆるレベルで接触形態を研究し、実践する者ではなく、外部から持ち込まれた不適切な定義であると言えるだろう。

では、この時点で万年合気道をどのように定義すればよいのだろうか？実際には、「物理的な」定義は必要ない。畳の上で、あらゆる手段を使って物理的な接触を求める必要がないのと同様だ。



この方法は、現在の状況に関わらず、あらかじめ定められた型(一教、二教、三教など)を厳密に正統的に実行しようとする、より伝統的な稽古方法とは明らかに異なると言えるでしょう。

しかし、万年合気道には、あらかじめ定められた目標はありません。相手の動きを理解し、活用する過程を通して、自身の感受性を磨いていきます。事前に準備し何かをやろうということではなく、ごく自然に、ただ成り行きに任せるだけです。

この探求が自身の成長に役立つかどうかは、各自が判断しなければなりません。

そして、この探求において、プロ意識、穏やかさ、そして優しさをもって私たちを導いてくださる武田大雄先生に、心から感謝申し上げます。



追記、
ああ、そうそう…ニュースのことだった!何か忘れていたような気がした。でも、習慣を捨てることも時には良いことだから、それも忘れてしまおう。激しい肉体的な接触を求めることであれ、他のことであれ。
とにかく、セミナーは2026年3月28日~29日にトリノで開催された。アンジェロ・アルマーノとナンド・シルヴァーノの企画のおかげであり、彼らに感謝の意を表す。満足そうな参加者の集合写真は、土曜日の午前中のクラスの最後に撮影された。
P.B.

